ミッドナイトダークネス

四神　夏菊

呪いの始まり

　ルーナティア　黒の神殿

ここは、ソニック達の住む世界とは違う次元・場所に存在する世界『ルーナティア』

「・・・・・」

夜の闇に包まれた静かな神殿に人影があった。人影は通路の先に祭られていた宝箱を開けた。

「見つけた。」

入っていたのは黒表紙の少々厚めの本と黒い杖。

「これでもう一つの私の世界を・・・」
「待て！」

入ってきた通路にもう一つの影が

「変なことを考えるな！　また同じ過ちを起こすきか！？」
「うるさい！　私に口答えをするな！」
「オマエ、相棒までを捨てて何をする気だ！？」
「あんたなんかに関係ない！　見つかったのなら！」

本を持っていた人影が持っていた煙玉を床に投げつけた。

ボン！

「煙球！？　ゲホゲホ・・・」
「じゃあね！」

人影は走っていった。

「待て！」

咳き込みながらもう一人は追って行った。

「どこだ！」

人影は外に出てもう一人を探した。

「ちっ、もう出てきたのか。でも、遅かったな。」
「レオリナ！」

レオリナは飛行機に乗ってもう空に浮かんでいた。

「遅かったなクロノア、でも私を止める事はもう誰にも出来ない！」
「どこへ行く気だ！」
「そんな事オマエに教える義務は無い。じゃあね、黒き旅人さん。」
「待て！」

レオリナを乗せた飛行機は飛んで行ってしまった。

「くそっ！」

クロノアは飛行機を見ながら言った。

「クロノア！」
「！、タット！」

やって来たのはレオリナの相棒のタットだった。

「クロノア、お願い！レオリナを止めて！」
「タット。」
「レオリナはこの世界を超えて別の世界にある神殿へ向かっていったの。」
「どうしてそれを！？」
「レオリナの様子がおかしい時に彼女が集めた資料を読んだの。そしたらこの神殿に黒き呪いを司る本と杖が有るって。」
「そのあとの目的の場所は！？」
「別次元のウィンディバレーがある島だって。」
「でもどうやってそこへ行けば・・・」
「貴方は『夢を見る黒き旅人』でしょ？、この世界での夢を抜けて別の夢を見れば行けると私は思うんだけど行けそう？」
「何とかやってみるよ。」

クロノアは目をつぶりしばらく時間が過ぎた。
するとクロノアの周辺の空間がだんだん歪み始めた。

「何とか行けそうだ、これでレオリナを追うよ。」
「気よつけて、クロノア。ロロ達には私から伝えとくわ。」
「ゴメンな、ロロ、ポプカ。」

クロノアは呟きながら謝った。

「じゃあ、行ってくるよ。」
「気よつけてね。」

クロノアは空間が歪んだ道を抜けていった。

「クロノア・・・」

タットはクロノアを見送った。

　エンジェルアイランド

「？　なんだ？」

ナックルズは昼寝をしている最中に出てきた影に驚いていた。
起きて空を見てみるとメカが浮いていた。

「またエッグマンの奴の仕業か？！　まったくこりねーな。」

だが予想外のことが起きた。
飛行物体からいきなりナックルズに向けてビームが発射された。

「な！」

ナックルズはビームを避けたが足に当たってしまった。

ピシピシ・・・

「くそ、うごかねえ。」

飛行物体は行ってしまった。

「くそ、何だってんだ。」
「おーい、ナックルズ。何やってんだ？」

やって来たのはソニックだった。

「ソニック！」
「なんかすごい格好してんな。モデルの練習か？」
「違う！」

ソニックはからかいながら言った。

「いきなりビームを撃たれてこうなっちまったんだ。」

「足が石に！？」

ナックルズの足は石になってしまっていた。

「誰の仕業だ！？」
「わからないが、多分あいつだと俺は思うぜ。」
「Ｄｒエッグマンか。」

ソニックは考えながらいった。

「あいつ、トロピカルアイランドの事件からもう立ち直ったって言うのか？」
「多分な。」
「だったら聞いてくるしかないな。」
「どこにいるのかわかるのか？」
「ああ、こっちの島に戻ってから島を走ってたら『マリンコーストリゾート』にエッグマンがいたんだ。多分まだいると思うぜ。」
「俺も行くぜ。」
「何言ってんだ？　足が動かないのに。」
「・・・・そうだったな。」

ナックルズの両足は石のままだ。

「俺が行って見て来てやるからお前は大人しくしてろよ。」
「頼んだぞ、ソニック！」

ナックルズはソニックを見送っていった。

「だが、そう長くは待ってられそうに無いな。」

ナックルズの足の石は侵食性だった。

「ここじゃまともに風と雨を受けちまうから移動するか。」

ナックルズは拳を突きながら前進していった。

「今回はどうなっちまうんだかな。」

だんだんと青空が曇り出していく空を見ながらナックルズは呟いた。

ー続くー

　マリンコーストリゾート

ソニックはエッグマン達のいるとされる海岸まで走っていった。
海岸にはつい最近立てられたと思われる小屋が建っていた。
ソニックが小屋の前に行くとちょうど小屋からデコーとボコーが出てきた。

「おい、」
「ソ、ソニック！」

デコーとボコーは驚きを隠さず言った。

「エッグマンはいるか？」
「ソニック、大変なんだ！、エッグマンさまが。」
「エッグマンがどうしたんだ？」
「とりあえず中へ。」

ソニックはデコーとボコーに連れられて小屋へ入っていった。
入るとエッグマンは小屋の奥のベットの上に居た。

「エッグマン様。ソニックがいらっしゃいました。」
「な、ソニック！」
「おいエッグマン、聞きたいことがあるんだ。」
「オマエに何を話せというんじゃ、この状況で。」
「！、エッグマン！おまえ！」

エッグマンの下半身も石になっていた。

「さっき外に出ていたら空からビームを当てられたんじゃ。」
「エッグマン、オマエもなのか。」
「オマエもってことは他にもいたのか。」
「ああ、ナックルズがそれと同じ物を受けたらしいんだ。」
「この石、侵食性らしいのう。足からだんだん上ってくるんじゃ。」
「まさか、ナックルズも。」

「おそらくな。」

ソニックはエッグマンが主犯ではないことがわかった。

「エッグマンじゃないってことは誰がこんなことを。」
「わからん。でも空から撃ってきたってことは飛べるやつじゃな。」
「でも、テイルスがそんなことをするとは思えない。」
「だがビームってことはメカからしか考えられんばい。」
「他にやれる奴はいないですたい。」
「ワシは動けんがオマエは動ける。とりあえず確認ぐらいはして来い。他にも犠牲者がいるかもしれんからな。」
「ああ、急いで確認してこよう。」

ソニックは小屋を飛び出していった。

「エッグマン様、大丈夫ですたい？」
「動けんがこれぐらいなんてこと無い。それよりデコーとボコー、お前らも気よつけろ。空からだからな。」
「エッグマン様・・・」

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

「テイルス！」

ソニックはいきなりテイルスの工房へ入ってきた。

「うわ、ソニック。どうしたの？」
「テイルス、オマエは大丈夫か？」

ソニックはテイルスの姿を確認した。

「なにがあったの？」

テイルスは何があったのか聞いた。

「ナックルズとエッグマンが得体の知れない奴からビームを打たれて足が石になっちまったんだ。」
「足が石に！？」
「ああ、だから他の奴らもどうなったか確認してるんだ。」
「エミーならさっき会ったよ。でも石になんてなってなかったけどな。」
「エミーが来たのか！？いつ？」
「ちょっと前に、ソニックを探してたみたいだけど。」
「エミー！」

ソニックはマッハで外に出て行った。

「ソニックも忙しいな。」

テイルスが言ったら屋根から

ドン！

「え！今度は何！？」

大きな音につられてテイルスは外に出て行った。
外には人が倒れていた。

「だ、大丈夫！？」
「☆〇Э@йЙΘN・・・」

テイルスが支えながら落ちてきたと思われる人を起こした。

「立てる？」
「ж、Π★、∇Σψνдй。」

「何言ってるんだろう・・・わかんないよ。とりあえずこっちに。」

テイルスはジェスチャーで手招きした。

「こっちに来て。」
「▼ψƏ∑▽？」
「ううーん、　そうだ！」

テイルスは思いついて工房の中にいった。

「たしかここに入れといたと思ったんだけど・・・」

テイルスは引き出しの中を探した。

「えーっと、あった！」

テイルスは中からリストバンドを出した。
そしてまた外に。

「これ、つけてもらえる？」

テイルスは手渡してジェスチャーでお願いした。

「▽Θ？й★。」
「とりあえず、手貸して。」

テイルスはその人の手にリストバンドを付けた。

「僕の言ってる事わかる？」
「あれ？わかるよ。なんで？」
「これは翻訳機能が付いたリストバンドなんだ。」

「そうなんだ。ありがとう。」
「いいってこれくらい。あ、名前、まだ言ってなかったね。僕はマイルス・パウアー　皆からはテイルスって呼ばれてるんだ。君は？」
「クロノア。」
「クロノアだね、よろしく。」
「こちらこそ、テイルス。」

二人は握手した。

「そうそうクロノア、どうして屋根の上から降ってきたの？」
「屋根？あ、そっか。空から出てきたのか。」
「？」

クロノアは変わったことを言った。

「僕は違う世界から来たんだ。ルーナティアって所。」
「ルーナティア？」
「うん、そうだ、こんなことしてるんじゃなかった。テイルス、ここはどこ？」
「ここはミスティックルーインだよ。」
「ここに、ウィンディバレーっていう所、無い？」
「ウィンディバレー？」

テイルスはしばらく考えこんだ。

「あ、あるよ！　ここの島には無いけど別の島に。」
「ほんとに！？、良かった。」
「なにがよかったの？」
「こっちの世界に僕達の世界に居た人がこっちに来てるんだ。メカに乗って。知らない？」
「ううん、知らない。あ、でもソニックなら知ってるかな？」
「ソニック？」
「うん。いつもいろんな所に行ってるから他の人が来てたら知ってるはずだよ。」
「ソニックはどこにいるんだ？」

「今ちょうどオリエンタルシティに行っちゃったんだ。だから僕達も行こ。」
「うん。」

テイルスとクロノアはソニック達を追って走っていった。
空は綺麗な快晴から一編、黒い雲が半分を覆っていた。

　ー続くー

新たな犠牲者とヒント

　オリエンタルシティ

テイルスは異国の人、クロノアと共にエミーを探しに行ったソニックを探していた。

「クロノア、付いたよ。ここがオリエンタルシティ。」

そこは大きなビルが立ち並ぶ街中だった。

「ここにソニックって人がいるの？」
「多分ね、とりあえずエミーのアパートへ行ってみよ。」

テイルスとクロノアはエミーの住んでいるアパートへ向かっていった。

「付いたよ、多分ここのアパート。」

テイルスとクロノアは一つのアパートの前に来た。

「何階の部屋なの？」

クロノアはアパートの窓を見ながら言った。

「確か３階だと思うんだけど。とりあえずはいろ。」

テイルスはアパートの入り口に入っていった。
エレベーターで３階へ

「付いた。」
「ええっと、あ、ここじゃない？」

テイルスは一つの表札を見つけていった。

『ＡＭＹ　ＲＯＳＥ』

「エミー　ローズ？」
「そう、エミーの名前だよ。居るかな？」

テイルスはチャイムを押した。

♪♪♪♪♪

「・・・・・・」
「出ないね。」

カチャ、

「あ、ドアの鍵が開いてる。」
「無用心だなー」
「エミー、いるの？」

ドアを開けてみたら中は蛻の殻らしくとても静かだった。

「おかしいな、ソニックが先に来てるはずなんだけど。」
「他に行きそうな所は？」
「うーん、あ、ナックルズのところかも知れない。」
「じゃあ、そこに行ってみよ。」

テイルス達はエンジェルアイランドに向かっていった。

　エンジェルアイランド

「やっと付いたー。」
「ここまで結構かかったね。」
「あ、いたよ。」

島にはソニックと思われる人影が。

「ソニックー」

テイルスはソニックのもとへ
それに付いて行くクロノア

「あれ？」
「どうしたの？テイルス」
「ソニックだけど、様子が変。」

ソニックはその場に立って動いていない。
風が吹いても髪がゆれていない。

「ソニック？」

テイルスは近くに行って声をかけたが返事が無い。

「ソニックってば」

テイルスはソニックの肩に触れた。

パタ。

「！　ソニック！？」

ソニックはなんとぬいぐるみになっていたのだ。

「ソニック、どうしたの！？」
「テイルス、それ。」
「ソニック。。。」

テイルスの目から涙が出てきた。
クロノアは近くに何かあるか見回した、

「・・・　テイルス、ここにも大きなぬいぐるみが。」

クロノアが近くにあったぬいぐるみを拾って持ってきた。

「エミー！　ナックルズ！」
「でも何でぬいぐるみに？」

テイルスはソニックのぬいぐるみを回収した。
ぬいぐるみになったせいかとても軽い。

「どうする。テイルス。」
「とりあえず僕の工房へ。」
「うん。」

テイルスはソニック達のぬいぐるみを持って工房にダッシュした。

　テイルスの工房

テイルスは持ってきたぬいぐるみを部屋のソファの上に置いた。

「ソニック。。」

テイルスの目から涙がこぼれた。

「テイルス、とりあえず泣かないで。」

「うう。。」
「泣いたってソニックはもとに戻らないでしょ。」

「うん。。　そうだね。」

テイルスは涙を拭いた。

「でもどうしてぬいぐるみに。」

「あのビームのせいみたいだぜ。」
「え？」

テイルスは声のした方を振り向いた。

「ストレンジャー！」
「よ、テイルス久しぶり。　そっちの人は？」
「ああ、クロノアだよ。クロノア、あの人はストレンジャー。」
「始めまして、ストレンジャー。」
「ああ、よろしくクロノア。」

ストレンジャーとクロノアは握手した。

「ストレンジャー、さっき言ってたビームのせいって。」
「ああ、エッグマンに聞いたんだ。」
「エッグマンに？」
「こっちに来たときに偶然会ってな。なんでも空から打たれたって言ってたかな。」
「あ、ソニックに聞いたよ。ナックルズとエッグマンの下半身が石になってしまったって言ってたけど。あれ？」
「そう、そのビーム、石が侵食してそのあとはこうだってな。」

ストレンジャーは右手で持ってきたぬいぐるみを見せた。

「エッグマン！」

「話をしてたら急に石になったと思ったら、ぬいぐるみになっちまったんだ。」
「じゃあ、ソニック達は。」
「多分な、不意打ちされたんだろ。」

ストレンジャーはエッグマンをソニック達の横に置いた。

「どうしよう。」
「とりあえず、もとに戻す方法を考えるしかないな。」
「うん。」

ストレンジャーはソニック達のぬいぐるみをチェックし始めた。

『見た目は本人そっくりだな。ぬいぐるみだからか結構軽いし。なにも付いて無、』

「テイルス、クロノア。」

ストレンジャーは２人を呼んだ。

「どうしたの？」
「これ。」

調べていたソニックのぬいぐるみの頭に穴が開いていた。
直径約１ｃｍほどの穴。

「穴？」
「何で穴が？」
「さあな、ビームの時に付いたのかわかんないけどなんか意味がありそうだな。」
「そうだね、でも何の穴だろう。」

ストレンジャーは穴に手をかざした。

「空気が吸い込まれてる。」
「空気が？」

「ああ、ここから外気の空気が吸い込まれてる。」
「ふさいだらどうなるんだろう。」
「なんか栓するものある？」
「探してみるね。」

テイルスは引き出しを探った。

「あ、あったよ。」

テイルスが持ってきたのはシャンメリーで付いてくる栓。

「よし、では早速。」

スポ。

「・・・・」
「何もおきないね。」
「そうだな。」

ポン。

ストレンジャーは栓を抜いた。

「どうすっかな。」
「うーん。」
「なんか対処の方法がわかればいいんだけどな。」
「あ、そうだクロノア。」
「何？」

「確かクロノア、ウィンディバレーに用があるっていってたよね。」
「うん。」
「何の用があるの？」
「あのビームに関係することがあるって、それで探してたんだ。」
「ビームの関係？」
「うん、あのビームを打ってた人の相棒が調べたんだ。何かあるんだと思うんだ。」
「そこに何かあるのかも。」
「ああ、ありそうだな。」
「明日行ってみよ。あ、でも場所が。」
「それなら大丈夫だ。　行ったことあるから。」
「ホント？ストレンジャー。」

テイルスが聞き返した。

「ああ、少ししか行ったことないけどな、ここから西に行ったところにあるぜ。」
「じゃあ、決まりだね。」
「じゃあ明日。」
「あ、待ってストレンジャー。」

テイルスはドアを開けて外に行こうとしていたストレンジャーを引き止めた。

「もし当たったら危ないから今日はここに泊まっていったら？　そのほうが安全だよ。」

テイルスの提案にストレンジャーは少し考えて言った。

「そうだな。　では、そうさせてもらおうか。」

ストレンジャーはドアを閉めた。

パシッ

「？　なんか今音しなかった？」
「いや、しなかったけど。」
「そう。」

テイルスの家にいることにしたストレンジャー、一難をテイルスの一言で救われていた。
ドアを閉めていなかったら放たれたビームに直撃だったから。
このあとはどうなるのか。

ー続くー

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

朝になったにもかかわらず日差しは届かない、天気はあいにくの曇り空

「ストレンジャー、どう？」
「風は無いみたいだな、波が立ってない。嵐にはなりそうに無いぜ。」

テイルスとストレンジャーは窓から外の様子を伺っている。

「じゃあ、大丈夫そうだね。」
「メカの調子は大丈夫そうか？」
「うん、波が全然無いなら平気だよ。」
「じゃあ、行こうぜ。　テイルス、クロノア。」
「うん。」
「ソニック、必ずもとに戻してあげるからね。」

テイルスはぬいぐるみになってしまったソニック達に言いかけ、はしごを降りていった。
マンホールからはしごを伝って、テイルス達は工房からの地下ルートを通り、海辺へ向かっていった。

「まさかこんなルートがあったなんてな。」
「海に直接出るためのメカはここに置いてるんだ。」
「テイルスは何でも作れるんだね。」
「えへへ。」

そんな会話を交わしながら目的のメカがあるルームへ。

「真っ暗だよ。テイルス。」
「今明かりをつけるからね。」

ガコン。

テイルスは壁に取り付けてある照明用のレバーを下ろした。

「すごーい！」

テイルス達がいる部屋に明かりが灯ると目の前に大き目の水上スキーの姿が出た。

「水上＆陸を走行できるメカ『カレント』だよ。」
「速そうだな。でもビームの防御はどうするんだ？」
「大丈夫、反射効果を持つシェルターだから物理以外は効かないよ。」
「でもこんなメカ、いつも間に作ったんだ？」
「ストレンジャーが来る前に設計図が出来てたんだ、それから少しずつ作ったんだよ。」
「じゃあ、速いとこ行こう。」
「うん。」

三人はメカに乗車した。

「行くよ。準備はいい？」
「ＯＫ！」
「いつでもいいぜ。」

「前方シェルター、オープン！」

テイルスが言うとルームと部屋を仕切っていた壁が開いていった。

「カレント、発信！」

テイルスがアクセルを踏むと

ビュン！

いきなり時速３０ｋｍで発射した。

「おおっと、踏みすぎちゃった。」
「でも速ーな。」
「海風が気持ちい。」

海を爽快に進んでいくカレント。

「ストレンジャー、方向は？」
「このまま西に行けば見えるはずだぜ。」
「この様子だと早く付きそうだね。」

クロノアは耳を靡かせながら言った。

そして進むこと１時間

前方に島が見えてきた。

「あ、島が見えてきたよストレンジャー。」
「あの島だ。確か中心部にその谷があるはずだぜ。」
「でもどこにメカをとめるの？」
「大丈夫だよクロノア、このまま島に行くよー」

メカは少し減速しながら島に接近していく。
そして島に乗り上げる直前で

「カレント、モードチェンジ！」

テイルスがボタンを押すと船形態から車に。

「これで島を進んでいこ。」
「楽ちんだな。」

カレントは島の道を軽快に進んでいく。

そして進むこと２０分。

「風が出てきたよ、テイルス。」
「そろそろ降りた方がいいな。風が強くなってきたってことは近づいてる証拠だからな。」
「あ、洞窟だよ。」
「ここから風が出てるみたいだね。」

減速しつつそのまま進んでいく。
すると目の前に風を噴出していると思われるポイントが。

「ここが入り口だぜ。」

車は停車した。

「ここの風に乗ればいいんだ。ここからは足で行くぜ。」
「うん。」
「よっと。」

テイルスとクロノアは車から降りた。

「おおっと。」

クロノアの帽子が飛ばされそうになった。

「ちょっときつめにかぶった方がいいぜ。飛ばされるとどこに行ったかわからなくなるからな。」
「うん。」

クロノアは帽子を調節した。

「よし、行こうぜ。」
「うん。」

テイルスとクロノアとストレンジャーは噴射ポイントに乗って一気に上へ上がっていった。
そのままどんどんあがってウィンディーバレーへ。

ー続くー

突破口と決意

　ウィンディーバレー

テイルス、クロノア、ストレンジャーは風の噴出し口からの風に乗って上空へ。
風がどこの方向からも吹いてくる谷、ウィンディーバレーに付いた。
谷といっても足元はレールや浮島ばかり。
ここに呪いを解く方法があるのでしょうか。

「わあ、風が強いねー」

テイルスの前髪は左右前後から吹いてくる風でいろんな方向へ流されていた。

「風に注意しろよ。飛ばされたら海に落ちちまうぜ。」

下を見ると真っ青な海が敷き詰められているかのようだった。

「海かー、落ちたらやばそうだな。」
「クロノア、どうして？」
「・・海が苦手なんだ。」

クロノアは泳げないのだ。

「大丈夫、落ちてもちゃんと助けに行ってやるから。」
「そうだよ、だから大丈夫。」

ストレンジャーとテイルスは言った。

「うん。ありがとう二人とも。」
「さあ、行くぜ。」
「うん。」

テイルス達はレールの道を走って進んでいった。
時々つむじ風に乗って上へ下へと流されつつ先へ進んでいった。

「テイルスー、ストレンジャー。」

「どうしたー」
「あそこー、何か遺跡があるよー。」

クロノアが指差した先には白い神殿がある浮島があった。

「行ってみよ。」

テイルスとクロノアとストレンジャーは神殿へと飛んでいった。

　白の神殿。

「神殿だね。遠くから見たより結構大きいね。」
「ここに何かあるかも、ビームを打つ道具が合ったのは黒の神殿にあったから。」
「黒と白か、関係性はありそうだな。」
「とりあえず行ってみよ。」

神殿へ足を踏み入れていった３人。
トラップ等は無く道を進んでいくと広間に出た。

「あ、何かあるよ。」

テイルスは走って宝箱の元へ。

「よいしょ。」

宝箱を開けると中から厚手のカバーが付いた本が出てきた。

「本見たいだね。」
「何が書いてあるんだテイルス。」
「えーっと。」

本を開くと文字がびっしり書いてあった。

『ΘΙΓξΞйψ◇；Л－Л。』

「うーん、なんて書いてあるんだろう？？」
「これじゃ読めないな。」
「クロニタイコウスルモノへ。」
「クロノア、読めるの？」
「うん、こっちの世界の文字みたいだから。」
「へー。すごいね。」
「そ、そうかなー。」

クロノアはテイルスの褒められてちょっと照れていた。

「じゃあいったん戻って工房で解読してもらえる？」
「そうだな、ここじゃいろいろ危なそうだからな。」
「うん。でもどうやって戻るの？」
「そのまま飛んで戻るか。」
「本は僕が持ってるよ。」
「うん。」

テイルスはクロノアに本を預けた。

「じゃあ、行くぜ。」
「うん。」
「いいよ。」

ストレンジャーはクロノアを持って入り口まで飛んでいった。

そしてしばらく飛んでウィンディーバレーの入り口に。

「やっと付いたね。」

「結構距離があったな。」

話しながら３人は乗ってきたカレントに乗り込む。

「準備はいい？２人とも。」
「いいぜ。」「ＯＫ。」

「カレント、発信！」

そしてカレントでもと来た道を戻っていった。

しばらく道を走ってまた海へ

「あとは海を横断していくだけだね。」
「そうだな、でもあんまり雲行きが良くないみたいだな。」

空を見てみると雲がだんだん覆われて嵐が来そうな雲行きだった。

「嵐が来そうだな。」

ストレンジャーが言うのを待っていたかのように海は段々波が高くなってきた。

「大丈夫？ テイルス。」
「これぐらいならね、シェルターＯＮ！！」

テイルスはメカについていたボタンを押した。
するとメカの上部に綺麗なシェルターが展開された。

「これで雨と波は大丈夫だよ。」

高波がメカに襲ってきたがシェルターの上を流れて乗っている３人には何も降りかかってこなかった。

「今のうちに。」

テイルスはスピードを上げて走っていった。

ミスティックルーインが見えてきた頃。

「あ、ちょっとまずいなー。」
「どうしたテイルス。」
「ちょっとシェルターに負荷がかかりすぎたみたいでバッテリーがもう無いんだ。」
「あともう少しだからそのまま行こうぜ。」
「うん。わかった。」

テイルスはシェルターを解除した。
だがシェルターが完全に解除されたとたんに

パシ！！

「！！！！」
「何！！」
「まずい！」

上空にメカが現れ、ビームを放ってきた。

「あれが呪いの元か！」
「レオリナだ！」

するとビームが連続で発射されてきた。

「これくらいなら！！」

テイルスは見事なハンドルさばきで次々とかわしながら島へと急ぐ。

「こんなの当たらないよ！」
「テイルスすごーい！」
「えへへ、」
「テイルス！」
「え？」

褒められている隙に、テイルスめがけてビームが発射された。

「あ！」
「まずい！！」

とっさにストレンジャーがテイルスの上へダッシュした。

パシ！

「！」
「ストレンジャー！！！」

ストレンジャーが石になったと思ったらぬいぐるみになりテイルスの上に落ちた。

「くそ！！！」

テイルスはストレンジャーを抱えてながら操縦しつつ猛スピードでメカの収容ルームへ入っていった。

「隔壁緊急閉鎖！！」

テイルスは涙を浮かべつつそう叫ぶと１秒とかからずに扉が閉じた。

部屋は明かりがつけたままだったので暗くは無かったがテイルスはストレンジャーのぬいぐるみを抱えて泣いていた。

「ストレンジャーまで・・・　ゴメンね、僕のせいで・・・」
「テイルス。」

クロノアはテイルスのそばへ寄った。

思。」
「うん。・・・そうだね。」

テイルスは涙を拭いた。

「ソニック達やストレンジャーのためにも僕がしっかりしないと。」
「そうだよ。テイルス。」
「とりあえず工房に戻ってその本を解読しないと。」
「僕も出来る限り手伝うよ。」
「ありがとう、クロノア。」

テイルスはストレンジャーのぬいぐるみを抱えて、クロノアは白の書を持って工房へ戻っていった。

　ー続くー

優しさに触れて

　ミスティックルーイン　テイルスの工房

テイルスを守るために犠牲になりぬいぐるみになってしまったストレンジャーを抱えてテイルスはメカ収容ルームから移動していた。
後ろからはクロノアが白の書を持って付いていく。

「到着ー」

テイルスは地下への扉を開けて工房の中に入った。

「何とか帰ってこれたね。」
「そうだね。」

テイルスはぬいぐるみになってしまったソニック達が座っているソファにストレンジャーを置いた。

「じゃあ早速だけどクロノア、解読してもらえる？」
「うん。わかった。」

二人は部屋にあった机と椅子に座った。
そして本を開いた。
中はクロノア達がいた世界の言葉でいろいろと書かれていた。
そして探している項目をクロノアが探していく。

「ええっと・・・　あ、これだね。」

クロノアがあるページでめくるのをやめ読み始めた。

「クロノノロイニカカッタモノヲモトニモドスホウホウ。ソノノロイヲトクタメニハ、イッテンノケガレノナイウツクシイミズト、カゼヲアヤツルモノトリングガヒツヨウ。」
「一点の汚れが無い水と風のリングがいるの？あとは？」
「ソシテモットモタイセツナモノハ、ヤサシイココロ。」
「優しい心・・・」

「とりあえず必要なものから集めよう。方法はそれからでも。」
「そうだね。」
「水はどこか綺麗な場所から集めないと。どこか心当たりは無い？」
「そうだなー、あ！」
「何？」
「確かこの前、ソニックと行った『ミドルガーデン』に湧き水があったよ。あそこなら多分。」
「じゃあとりあえずそこに目星を付けとこ。」
「あとは風のリングか・・・」
「それなら持ってるよ。」
「え！本当クロノア？」
「多分このリングのことなんじゃないかな。」

クロノアは最初から持っていたリングを出した。

「このリングは風を操る力があるんだ。」
「じゃあ水だけ採取してくれば次のステップが踏めるね。」
「そうだね。」
「あ、でも外は危険なんだよね。どうやって安全にいこうか。」
「本に書いてあるかな？」

クロノアは本をめくって項目を探した。

「ええっと、ノロイノチカラヲフセグテダテ。ノロイハヤミトアウンノチカラヲツカッテツヨクナル、ソノタメフセグニハソノハンタイノチカラ、ヒカリトカゼガイル。」
「光と風ね。ちょっと難しいね。」
「使っていたメカの例が載ってるよ。テイルス。」

本の１ページに設計図と思われるものが書いてあった。

「じゃあそれを訳して僕が改良するよ。」
「わかったよ。」

クロノアとテイルスは一晩かけて和訳しメカと作っていった。

　翌日

「よし、出来たよクロノア。」

テイルスは寝ていたクロノアを起こして言った。

「あ、もう出来たの？」
「うん。設計図のを小さめにして作ったリングだよ。」

テイルスが作ったのは指輪だった。

「とりあえず付けてみて。サイズは合ってると思うから。」

テイルスとクロノアは指輪をつけた。

「うん。ぴったりだよ。」
「オートで光と風を作るからつけているだけで安全だよ。」
「じゃあまずは水の採取だったね。行こうか。」
「うん。」

クロノアとテイルスはビンをもってミドルガーデンへ向かった。

　ミドルガーデン

「ここだよクロノア。」
「とっても綺麗なところだね。」
「前来た時よりも緑が綺麗ー。」

自然に出来た芝生に小さな花々がたくさん咲いていた。

「ええっと水は？」

クロノアは水を探した。

「こっちだよ。」

テイルスは入り口付近から右へ歩いていった。

「ほらここ。」

テイルスが連れて行ったところは自然に出来たのか海に向かって流れていた小さな泉だった。

「ここが泉の湧く場所だね。ここの水ならとっても綺麗だと思うんだけど。」
「とりあえず汲んで持って帰ろう。」

クロノアは持っていたビンに一杯に水を汲んだ。

「よし、水の採取完了。」

ビンに蓋を忘れずにするクロノア。

「じゃあ帰ろうか。」

テイルスとクロノアは少々急ぎ足で戻っていった。

　テイルスの工房

「汚れの無い水と風のリング。集まったね。」
「じゃあ次は元に戻す方法だね。」

クロノアは昨日同様に白の書のページをめくって項目を探していく。

「えっと。　ノロイニカケラレタモノヲモトニモドステジュン。ミズニカゼノチカラヲソソギ、ノロイニヨッテアケラレタアナニソノエキタイヲソソイデイク。マンタンニナッタラエキタイガコボレナイヨウニシバラクササエテオク。」
「そうすれば元に戻るの？」
「ダガチュウイシナケレバナラナイコト、ケガレタミズ、マタハケガレタココロノモチヌシガソレヲソソグトモトニハモドラズ、ショウメツシテシマウ。」
「汚れた水と汚れた心。」
「シンノセイナルチカラガソロイシトキ、ノロイハトケルデアロウ。」

「僕は・・」

「テイルス？」
「僕はソニック達を元に戻すことができるのかな・・・」
「大丈夫だよ。ソニックさんやストレンジャーさんを戻そうとしている心がある限り成功するよ。」
「そうかな・・・」
「信頼あってこその光が大切なんだよ。早く元に戻してあげよう。皆を。」
「うん。」

テイルスとクロノアはぬいぐるみになったソニック達を見て決意を硬くした。

「じゃあ、まずは調合からだね。」

テイルスは持ってきた水を別の綺麗な容器に移し替えた。

「風球！！」

クロノアは容器に向かって風玉を打ち込む。
すると風玉に水が吸い寄せられ混合し、美しい液体が出来た。

「よし、あとは注ぐだけだね。」

クロノアはソニックのぬいぐるみを持ってきた。
ソニックの穴は頭の上にあった。

「いくよクロノア。」
「いいよテイルス。」

テイルスは慎重に水を注いでいく。

『ソニックがもとの姿に戻りますように。』

願いを込めながら満タンになるまで注いでいく。
ソニックのぬいぐるみは重さを増して本当の重さへと近づいていく。

「これで満タンだね。」
「水で重くなったね。」

テイルスは容器を机に置く。
クロノアはこぼれないように支えている。

そして少し時間が過ぎて。

キラキラ・・・

「あ、ソニックのぬいぐるみが。」

ソニックのぬいぐるみはキラキラ輝きながらクロノアの手を離れ空中に。

キラン☆

強く輝きソニックの体を包み込む。
そして、

タッ！

「おっと、危ない危ない。」

そこには元に戻ったソニックが立っていた。

「ソニック！！」

テイルスは言うとソニックに抱きついた。

「ソニック！、良かった、元に戻って。」

テイルスは泣きながら言った。

「ありがとうな、テイルス。」
「良かったね、テイルス。」
「うん！」

テイルスは涙を拭いて言った。

「クロノアとか言ってたな、ありがとうな、テイルスを励ましてくれて。」
「僕は何も。」
「でも言ってたことぐらい、俺にも聞こえていたんだぜ。」
「そうなんですか？」
「あ、そうだ、皆を元に戻さないと。」
「そうだな。」

そして次々と同じ手順でナックルズ、エミー、ストレンジャー、エッグマンを元に戻した。

「まったく、ひどい目にあったわ。」
「元に戻らないかと思ったぜ。」
「散々な目にあったわい。」
「ありがとうな。テイルス。」

「皆もとに戻ってよかった・・・」

フラッ

「あ、テイルス。」

ストレンジャーがテイルスを支えた。

「テイルス？」
「ＺＺＺＺＺＺ・・・」
「きっと疲れたんだな。テイルス。」
「昨日は寝ないで頑張って作業してたもんな。」

「ベットに寝かせてくるぜ。」
「ああ、頼むぜストレンジャー。」

ストレンジャーはテイルスをお姫様抱っこで持っていった。

「いいなー、ソニックにあんなことしてもらいたかったなー」
「何言ってるんじゃ貴様は。」
「乙女の空想に文句言わないで！」

元に戻ったソニック達はにぎやかに会話していた。
ストレンジャーはテイルスをベットにおいて毛布をかけてやった。

「ありがとうな、テイルス。　ゆっくり休めよ。」
「ＺＺＺＺＺＺ・・・」
「強くなったんだな。やっぱり。」

ストレンジャーはそんなことを言いながら、テイルスの事を椅子に座って見守っていた。

その様子をレオリナが窓から見ていた。

「私ったら、また変な過ちを犯していたんだな。何をやっていたんだろう。」
「レオリナ。」

レオリナの後ろに次元を渡ってきたタットがいた。

「タット。」
「レオリナ、そんなに思いつめないで、優しさの詰まった心が貴方を元に戻してくれたのよきっと。多分おかしくなったのはその杖のせいよ。」
「この杖が。」
「ええ、貴方の持っていた資料に抜けている部分があったから探して見たの。そしたら闇の封印

がちょうど解けて貴方に毒をまいたみたいなの。」
「この私がそんなのに負けていたなんてね。ちょっと泣けてくるわ。」
「でも優しい心がいつの間にか貴方を浄化してくれたのよ。杖はもう効力を失っているわ。罪は消えないかもしれないけどレオリナがその杖を処分することがきっとすることなのね。」
「そうね。こんなことをしてまたクロノアに迷惑をかけてしまったわね。」
「さあ、帰りましょレオリナ。クロノアには私から伝えておくわ。」
「今からか？」
「ええ。ちょっと待っててね。」

タットはクロノアのもとへ飛んでいった。

「本当に、貴方みたいな相棒がいて、私は幸せ者ね。」

レオリナは少し涙を浮かせながら言った。

そしてタットはちょうど外に出てきたクロノアに元に戻ったことを知らせていた。
クロノアはちょっと名残惜しそうな顔をしていたが「明日戻るから。」とロロとポプカへのメッセージをお願いしていた。
クロノアは悲しい顔をしないように中へ戻っていった。

そしてその日はテイルスはずっと眠り続けていた。
クロノアはソニック達に事件が解決したことと明日戻ることを伝えた。
ソニック達はそのことを聞いてその日の夜はパーティをして皆で楽しい時間を過ごしていた。
ストレンジャーはパーティには参加せずテイルスが起きるまでずっとそばにいた。
「テイルスなら泣かないと思う」とクロノアに伝えて安心させてパーティを楽しんでもらうようにした。

そして次の日。
皆に別れを告げてクロノアはもとの世界に戻っていった。
テイルスはストレンジャーが言った通りで泣かずに笑顔で見送った。
そして、ソニック達の世界はまた平和な日々が訪れ、平和に暮らしていたのであった。

時々、テイルスは別れ際にとったクロノアとの写真を見ていた。

ー　ＥＰＩＳＯＤＥ ＥＮＤ ー

ミッドナイトダークネス

http://p.booklog.jp/book/88792

著者：四神　夏菊
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/lilysfia/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/88792

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/88792

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ